

江戸時代に長崎から中国へ輸出された乾物海産物

松 浦 章

Export of Dried Seafood from Nagasaki to China during the Edo Period

MATSUURA Akira

In the early Edo period, the Tokugawa Shogunate or Bakufu had policies on how to keep the country closed from the outside world. However, even under Shogunate's strict control, China was open to trading mainly with Japan. A Chinese merchant ship called the "Karafune(唐船)" came to Japan's trading hub, Nagasaki, and brought silk and silk fabrics, Chinese herbal medicines, books, and sugar, for example. In return, they brought back a variety of things from Nagasaki to China such as copper and Japanese dried seafood (sea cucumber, abalone, shark fin).

In the Qing Dynasty, dried seafood was particularly liked and used for popular seafood dishes by the Chinese people at that time. Since the Genroku era (元禄時代) in Japan (康熙 27-42, 1688-1703) the export of dried seafood products gradually increased, and they were a popular food widely eaten, in particular, in the areas of the lower reach of the Chang River. In the late Qing Dynasty these products were transferred to the inland areas in China and more seafood products were brought for the Chinese to enjoy.

This article describes the changes in the amount of copper and dried seafood products exported from Nagasaki to China.

1 はじめに

清末に日本を訪れたことのある王韜が『甕牖餘談』巻四、「通商日本説」において、

日本一國、密邇中土、… 國朝順治以後、惟通市、不遣使、其市亦惟中國商船往、無倭船來也。其與中國貿易在長崎島、百貨所聚、商旅通焉。國饒銅、中土鼓鑄所資、自滇銅而外、兼市洋銅、… 每年採購定額、四百四十三萬餘斤、設官商額船十六艘、皆以內地綢緞・絲棉・糖・藥往易、商辦銅斤、必藉倭照以爲憑驗。¹⁾

と指摘したように、清代中国と日本との関係は、中国船が長崎に赴き交易する関係のみが維持されていた。中国商人が長崎に赴く最大の目的は中国で必要とする銅錢鑄造用のための銅を求めることであった。そのため中国商人は、中国産のシルク製品や生糸さらには砂糖や漢方薬剤をもって日本に赴き、銅と交易したのである。そのためには日本が発付する「倭照」すなわち「信牌、長崎通商照票」が必要であった。

ここに江戸時代における日中貿易による相互交易の特徴的な品々があげられている。日本から中国が輸入する最大の目標が日本産の銅であった。それが光緒初年（1875）に駐日公使として来日した何如璋は、彼の著書『使東雜記』の中で、

中商多以棉花・白糖來、以海參・鮫魚・諸海錯歸。²⁾

と記したように、中国から日本に貿易に赴く商人は、中国から棉花や白糖糖をもたらし、日本からの帰航に際して、干し海鼠や干し鮑など様々な海産物を持ち帰るとあるように、明治初期の日中貿易において日本から中国への主要な貿易品が乾物海産物となっていたのである。このように江戸時代における長崎貿易において対中国貿易の主要貨物に銅と乾物海産物があった。

清代の乾隆年間（1736-1795）中期以降において中国の対日貿易の基地になった浙江省の嘉興府平湖縣の乍浦鎮の歴史を記した道光八年（1828）刻本の『乍浦備志』巻十四には、

分官民二局、局各三船、每歲、夏至後、小暑前、六船裝閩・廣糖貨、及倭人所需中土雜物、東抵彼國。³⁾

とあり、中国側では官局、民局と二局の商人集団があった。官局が三隻、民局が三隻と合計六隻の唐船が日本に送られた。毎年の旧暦の夏至の後から小暑の前、西暦の6月下旬から7月上旬のころに日本へ向かった。それらの船には福建産や廣東産の砂糖や日本人が求める需要度の

1) 『筆記小説大観』第27冊（全34冊）、江蘇廣陵古籍刻印出版、揚州古籍書店発行、1984年4月、258頁。

2) 『小方壺齊輿地叢鈔』第10帙、282丁表。王錫祺編輯『小方壺齊輿地叢鈔』台北・廣文書局、1962年4月、52冊（7857～8106頁）、8001頁、（全64冊、全10296頁）。

3) 『中国地方志集成 郷鎮志專輯』20、上海書店、1992年7月、229頁（1132頁）。

高い中国産品を積載し、東方を目指して日本へ赴いたのである。そして、

九月中、從彼國裝載銅斤及海帶・海參・洋菜等物、回乍（乍浦）。⁴⁾

と、旧暦の九月中頃に日本から銅や昆布や煎海鼠そして海藻類を積載して乍浦に戻ってくると記されるように、日本から中国へもたらされる主要な貨物は銅の他に昆布や煎海鼠などの海産物があった。

日本産の乾物海産物の干し海鼠である煎海鼠、干しアワビ、鱻の鱠は、江戸時代に長崎から中国へ向けて大量に輸出されるようになる。とくに清代において干し海鼠は海參として、干しアワビは鰻魚、鱻の鱠は魚翅として当時新たに流行した海鮮料理の食材として好まれたのであった。そのため日本の元禄時代（康熙27～42、1688～1703）以降漸次輸出が増加し、特に中国の長江下流域の地域で消費されていた。清代後期にはさらに内陸部まで運ばれ、海參や鰻魚そして魚翅の消費は増えて清朝人の円卓を賑わしていた⁵⁾。

清朝中国が日本に求めた最大の物産は日本産の銅であり、清朝時代は「洋銅」⁶⁾と呼称され、康熙五十五年（1716）当時において清朝政府に供給された洋銅は、『上諭條例』乾隆元年（1736）戸部の「辦銅條例」には、政府に納められた銅は413万余斤であり、その内訳は洋銅が277万余斤、これに対して清朝国内産の雲南銅は166万余斤であった⁷⁾。その割合は日本銅が62.5%に対して雲南銅が37.5%であって、この数字からも当時の清朝社会では国内産の銅では需要を満たすことは決定的に出来なかったのである。そのため大型船舶による海上輸送という方法において便利な長崎からの輸入が重要な意味を持っていたのである。

その輸送を担ったのが中国帆船である江戸時代の人々が「唐船」と呼称した中国式のジャンクであった。これらの帆船は、運航に際して、海上を安定して航行できるように必要であったのが、安価で大量に積載可能な物資であり、バラストや底荷と言えるものである。それは中国からは日本へは、中国で安価で大量に集荷できる砂糖⁸⁾であり、日本の社会に好まれた。逆に日本から中国へは清朝社会が希求した銅すなわち洋銅であったが、日本産の銅の生産量が漸次

4) 『中国地方志集成 郷鎮志專輯』20、230頁。

5) 松浦章「日清貿易による倭物の中国流入について」『千里山文学論集』第7号、関西大学大学院文学研究科院生協議会、1972年3月、19～38頁（1-78頁）。

松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、382～402頁（704頁）。

6) 嚴中平『清代雲南銅政考』中華書局、歴史叢書、1948年8月、3頁（100頁）北京の戸部の寶泉局と工部の寶源局は毎年の鼓鑄用に440余万斤の銅を必要としていた（同書、4頁）。

7) 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、111頁（468頁）。

8) 松浦章「江戸時代唐船による砂糖輸入と国内消費の展開」、『東アジア文化交渉研究』第3号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2010年3月、335-359頁（1-635頁）。

減少していくなかで、それを補う意味で増えていくのが乾物の海産物であった。

そこで本論文では、日本から中国へ運ばれた銅と乾物海産物が、江戸時代の長崎貿易の歴史の中でどのように推移していったかを、長崎から中国へ帰帆した唐船の積荷貨物目録を検討する中で明らかにしてみたい。

2 元禄・宝永・正徳時期の海産物の対中国輸出

清朝が台湾の鄭氏を平定して、康熙二十三年（1684）に“展海令”を發布すると、中国沿海の商船が盛んに海外に進出し、特に集中した海外の国が日本であった。このため日本では年間に数千人もの中国人が長崎に滞在することになり、それまでの長崎市中での滞在を制限して、中国人が“唐館”と呼称した唐人屋敷に隔離することになる⁹⁾。この時期から中国に向けて輸出される海産物の量も漸次増加していった¹⁰⁾。

そこで長崎に年間70～80隻の中国からの貿易船が来航していた元禄・宝永・正徳時期の海産物輸出の状況について『唐通事會所日録』から見てみることにする。

① アワビ（干鮑）・フカヒレ（鱧鱈）

元禄二年（1689）四月三日に唐人屋敷において唐人からの要望のあった「買物」の品の中に、「いりこ・あわひ類毎日干候て連、買渡ル儀ニ御座候、蔵に入置候而ハ、尤時々干可申候」¹¹⁾と、いりことアワビを毎日乾燥して中国へ持ち帰る予定とし、その乾燥を行っていたことがわかる。

元禄十一年（1698）九月二日のことであるが、帰帆する二十八番船は「あか強く込入り申候にて、出戻り申候由」¹²⁾と、積載貨物として大量の銅を積んでいたのが航行が困難となって長崎に戻ってきた。同船に積まれていたのは「銅千五百箱程并俵物など多く積居申候」¹³⁾と、銅が1,500箱の他に俵物すなわち乾物海産物も積載していたのであった。

元禄十五年（1702）六月八日に天草に漂着して元禄十四年（1701）の二十三番寧波船が天草から送られて来た。同船には、「本船ニ積込申候いりこ・あわひ等、永、日和悪敷候に付、殊外しめり申候」¹⁴⁾とあるように、寧波船の長崎からの帰帆荷物に煎海鼠、干鮑が積載されていた。

9) 松浦章『近世東アジア氣域の文化交渉』思文閣出版、2010年11月、31～50頁（470頁）。

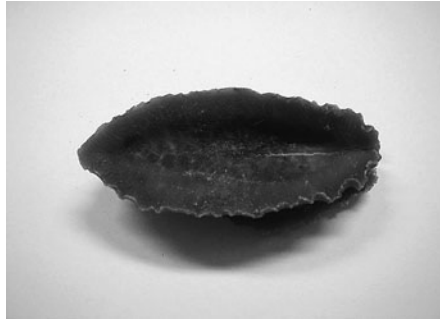
10) 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、382～402頁。

11) 1 大日本近世史料『唐通事會所日録』一、東京大学出版會、1955年2月、244頁（424頁）。

12) 『唐通事會所日録』二、東京大学出版會、1958年3月、330頁（392頁）。

13) 『唐通事會所日録』二、331頁。

14) 『唐通事會所日録』三、東京大学出版會、1984年6月覆刻、263頁（397頁）。



干鮑 (鮑魚)

しかし天候不順により出帆が長引き積荷の煎海鼠、干鮑が湿っていたとある。

宝永三年（1706）七月に、薩摩に漂着した宝永二年二十二番南京船が長崎に曳航されてきた。その船は長崎で解体され売却された。その乗員と積荷は、三十一番南京船と三十二番南京船、三十六番南京船、四十番南京船、三十三番世南京船に分散帰国することになる。乗員53名、積荷には銅が合計640箱の他に「いりこ・あわひ 三十一丸」と煎海鼠と干鮑が積まれていた¹⁵⁾。

宝永三年七月に九十一番台湾船から長崎町年寄福田傳之進等に献上された錦鶏の返礼として「いりこ三拾斤・干あわび三拾斤傳之進より参候」¹⁶⁾が渡されている。

宝永四年（1797）八月に八十一番台湾船が「いりこ拾三丸・干あわひ拾三丸・醤油五桶…」¹⁷⁾の支給を願い出て許可されている。他方、同月に七十六番南京船が帰帆に際して注文した「いりこ七百斤・あわひ・するめ・ふかのひれ・錦手・茶碗・猪口、メ七色者」¹⁸⁾は許可されなかった。また同月に八十一番船が帰帆貨物として積載していた「干あわひ拾三丸。唐人共氣ニ入不申、差返可申間、陸へおろし申度段願書」¹⁹⁾とあるように、帰帆貨物として積込まれた干しアワビが気に入らず返品したことがわかる。また九月には破船した船の残金から「いりこ・あわひ買調、三十九番船へ便乞唐人持乗り申筈二付」²⁰⁾とあるように、三十九番台湾船によって、いりことアワビが帰帆貨物となった。

宝永五年（1708）六月に積戻り船が「いりこ・あはひ・するめ・ところてん草、此四口」²¹⁾

15) 『唐通事會所日録』四、東京大学出版會、1984年7月覆刻、144、147～148頁（390頁）。

16) 『唐通事會所日録』四、152頁。

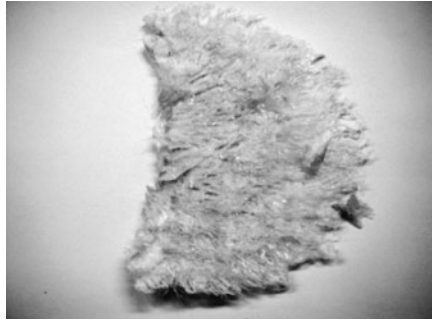
17) 『唐通事會所日録』四、243頁。

18) 『唐通事會所日録』四、244頁。

19) 『唐通事會所日録』四、246頁。

20) 『唐通事會所日録』四、261頁。

21) 『唐通事會所日録』五、東京大学出版會、1963年3月、45頁（324頁）。



鱧鱗（魚翅）

を要望し、積載が許可されている。同年六月に六十一番船の程益凡が帰帆貨物として「いりこ四百斤・干あわひ百斤・するめ貳百斤…右之俵物明朝乗せ申候」²²⁾と、その許可を得ている。

宝永六年（1709）六月十九日に帰帆する四十七番船主劉華謙が、「砂糖類百かこ餘口へ牛皮有之候を、何卒いりこ・あわひ・昆布類ニ替させ被下候様」²³⁾と、積荷の砂糖100籠と煎海鼠や干鮑と昆布などと交換を願い出ている。同年十一月に五十六番寧波船から「俵物手本」²⁴⁾を見たいとの要望があり、昆布・するめ・煎海鼠・鱧鱗・干鮑を見せて帰帆貨物としている。

宝永七年（1710）九月二日に二十八番台湾船と三十五番厦門船が「するめ・干鮑・醤油等之諸色買調」²⁵⁾と、するめや干しアワビを購入している。

正徳三年（1713）正月の頃には「いりこ・あわひ」は、寧波船や南京船が帰帆荷物として購入していた。²⁶⁾同年十一月二十七日に帰帆する三番南京船は、「昆布百廿丸おろし、それ代りいりこ・あわひ被遣被下候様ニと願申候」²⁷⁾とあるように、同船は帰帆貨物の昆布120丸のかわりに煎海鼠と干鮑を求めている。

正徳四年（1714）二月十二日に、四十六番船が帰帆荷物として「俵物、いりこ貳百斤、あわひ百斤、ふかひれ百斤願申候」と、煎海鼠200斤、干鮑100斤、鱧鱗100斤を願い出ている。²⁸⁾

22) 『唐通事會所日録』五、48～49頁。

23) 『唐通事會所日録』五、160頁。

24) 『唐通事會所日録』五、198頁。

25) 『唐通事會所日録』五、297頁。

26) 『唐通事會所日録』六、東京大学出版會、1965年3月、107頁（250頁）。

27) 『唐通事會所日録』六、210、211頁。

28) 『唐通事會所日録』七、東京大学出版會、1968年3月、22頁（257頁）。

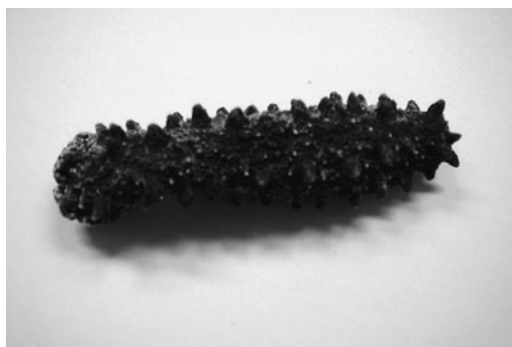
② いりこ（煎海鼠）

長崎において唐船の帰帆貨物として積み込まれたいりこは「近國より參筭二有之候」²⁹⁾とあるように、長崎から比較的近い地域から搬入されていた。おそらく後述するように長崎に近い大村や平戸産のものであったと思われる。

宝永五年（1708）二月に唐船が帰帆荷物として買い入れる品々を検分するため唐人屋敷には俵物商人³⁰⁾や「いりこ・鯛・ふかひれ・鰹節商人 五人」³¹⁾の内二人が毎日唐人屋敷に詰めていた。同年六月三日に帰帆する八十二番南京船が「いりこ貳丸」³²⁾の購入を願い出ている。

宝永七年（1710）閏八月二十六日に、御用物として中国船が持ち渡ってきた鳥類への返礼として次の各船に煎海鼠を贈っている。

二番寧波船	煎海鼠	十五斤一箱	青鸚哥壹羽代
六番船	煎海鼠	二十五斤一箱	錦鷄壹羽代
七番船	煎海鼠	十五斤一箱	青鸚哥壹羽代
九番寧波船	煎海鼠	十五斤一箱	晝眉鳥壹羽代
十一番船	煎海鼠	二十五斤入貳箱	錦鷄貳羽代
同船	煎海鼠	十五斤一箱	晝眉鳥壹羽代
十二番南京船	煎海鼠	十五斤一箱	八哥鳥（九官鳥）壹羽代
十五番南京船	煎海鼠	十五斤一箱	晝眉鳥壹羽代



煎海鼠（海參）

29) 『唐通事會所日録』二、387頁。

30) 『唐通事會所日録』四、302頁。

31) 『唐通事會所日録』四、304頁。

32) 『唐通事會所日録』五、30頁。

十六番南京船 煎海鼠 二十五斤入四箱 錦鶏四羽代

十八番南京船 煎海鼠 二十五斤一箱 相思鳥（鷓鴣）貳羽代³³⁾

以上の9隻に煎海鼠を合計190斤になるが、各唐船が長崎からの注文として持ち渡ってきた鷓鴣や錦鶏そして九官鳥などへの返礼として贈ったのであった。

正徳二年（1712）三月十一日に、四十一番船が帰帆貨物として「いりこ・ふかひれ・こんふ等」³⁴⁾を希望したが、中国船側の希望購入価格と乖離していたため取引は成立しなかった。

③ 宝永時期の中国船の帰帆荷物

長崎から貿易を終えて帰国する中国商船が積載する貨物について残された記録は多くなく、まとまったもので唯一知られるのが国立公文書館内閣文庫に所蔵される『唐蠻貨物帳』³⁵⁾である。その記述の最初に見られる宝永年（1709）六年七番船の積荷例を掲げたい。

寶永六丑年 七番南京船帰帆荷物買渡帳 船頭 沈秋堂 七月十日

御割付 賣立銀合百九貫八百目 金ニシテ千八百三拾兩

此払

一 銀貳貫七百目 丁銀ニ而持渡

一 銅 三万五千六百七拾三斤四合三勺貳七

但壹斤ニ付、壹匁壹分四厘貳毛宛

代銀四拾貫七百三拾九匁六厘

一 古地銅 千五百八拾七斤七合五勺

但壹斤ニ付、壹匁壹分六厘五毛貳弗余宛

代金壹貫八百五拾目壹分六厘

一 小間物色々 入合 五箇（内訳略す）

代銀六百九拾目

一 狐皮 四百六拾枚

但壹枚ニ付、壹匁六分三厘六毛九弗余宛

代銀五貫貳百五拾三匁

一 いりこ 六千百四拾六斤

33) 『唐通事會所日録』五、286～287頁。

34) 『唐通事會所日録』六、46頁。

35) 『唐蠻貨物帳』上、下、内閣文庫、1970年3月、（上下全影印、1626頁）。下冊に山脇悌二郎「『唐蠻貨物帳』解題」（1～12頁）が収められている。

- 但壺斤ニ付、三匁三分八厘壺毛貳弗余宛
 代銀貳拾貫七百八拾目九分七厘
- 一 ふかのひれ 四百七拾五斤半
 但壺斤ニ付、貳匁三分四厘壺毛五弗余宛
 代銀壺貫百拾三匁四分
- 一 干あわび 千五百七拾三斤半
 但壺斤ニ付、三匁五分七厘九毛八弗余宛
 代銀五貫六百三拾貳匁九分七厘
- 一 干貝 百八斤
 但壺斤ニ付、六分五厘宛
 代銀七拾目貳分
- 一 昆布 五千八百四拾壺斤
 但壺斤ニ付、貳分壺厘五毛宛
 代銀壺貫貳百五拾五匁八分壺厘五毛
- 右買物代銀合七拾七貫四百八拾五匁五分七厘五毛
 金ニシテ千貳百九拾壺兩壺歩銀拾匁五分七厘五毛
- 丁銀貳貫七百目 金ニシテ四拾五兩

日本ニテ遣捨銀貳拾九貫六百拾四匁四分貳厘五毛
 金ニシテ四百九拾三兩貳歩銀四匁四分貳厘五毛
 合金百九貫八百目 金ニシテ千八百三拾兩

以上

寶永六年丑七月十日

唐通事 藤 ③³⁶⁾

上記の記録を表示すると表1のようになる。さらに円グラフで表示すれば図1のようになる。これに対して積載貨物の量を図式したものが次の図2である。

この時期において長崎から帰帆する中国船の積荷は、銅が積載量の半数以上を軽く越えていたことは明らかであろう。

36) 『唐蠻貨物帳』上、2～7頁。

表 1 宝永6年7番南京船帰帆貨物等決算表

貿易品及び遣捨銀	貿易銀額：匁	金換算：両	積載量：斤
銀	2,700	45	
銅	40,739.06		35673.4327
古地銅	1,850.16		1587.75
小間物色々	690		
狐皮	5,353		
いりこ	20,780.97		6164
ふかのひれ	1,113.4		475.5
干しあわひ	5,632.97		1573.5
干貝	70.2		108
昆布	1,255.815		5841
買物品合計	77,485.575	1,291.5	
遣捨銀	29,614.43	493.5	
合計	109,800	1,830	51423.1827

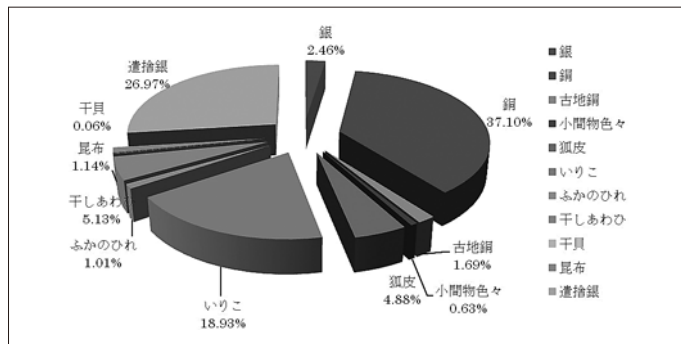


図 1 宝永6年7番南京船帰帆貨物貿易額：銀換算比

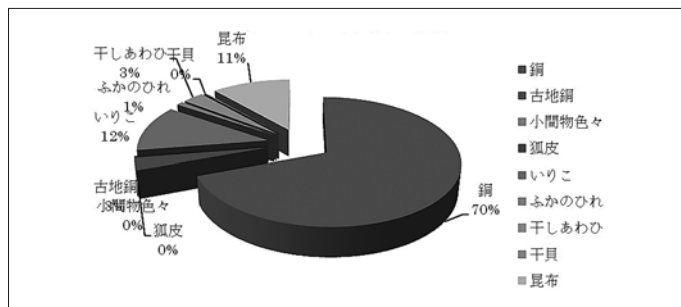


図 2 宝永6年7番南京船帰帆貨物積載量：斤

3 江戸中後期における海産物の対中国輸出

乾隆六年（寛保元、1741）十二月初八日に琉球国の大島に長崎から中国への帰帆唐船が漂着している。この船には徐惟懷等53名が乗船し、江南蘇州府呉縣の商人等であった。その積荷は、「條銅七万七千四百九十九觔」、「海參・鮑魚二万五千八十觔」、「紅菜・鱈魚四千二百觔」、「海帶二万四千觔」³⁷⁾などが積載されていた。銅が77,499斤、煎海鼠・干し鮑が25,080斤、そして昆布が24,000斤を積載していたことがわかる。これからみれば銅と俵物そして昆布の比率は銅が61.2%、俵物が19.8%、昆布が19.0%となり、銅の積載量がまだ多かったことがわかる。

さらに多くの銅を積載していた唐船の例が、乾隆二十一年（宝暦六、1756）十二月初四日付の福建巡撫鐘音の奏摺に見える。

浙江歸安縣商人高山輝、從乍浦出口、往販東洋置貨、回棹適遇颶風、於閏九月初五日、飄至閩省福清縣沙塢地方、船隻受傷、莫能駕駛回、帶有紅銅一十七萬二千五百觔、情願就閩取買、以供鼓鑄、…³⁸⁾

とあるように、長崎から中国浙江省に帰帆した唐船が海難に遭遇して、福建省の福州沿海の福清縣の近海に漂着して船が損傷を受けて、運航が困難となり、積載していた紅銅17万2,500斤を福建省政府に購入を依頼したことが報告されている。このことから宝暦六年（1756）当時の長崎からの帰帆唐船が17万余斤の銅を積載していたことがわかる。

宝暦十二年（1762）四月に長崎から帰帆した前年宝暦十一年辛巳年の七番船の帰帆荷物帳が知られる。それを見てもみることにする。

愛知県の刈谷市図書館に所蔵される村上文庫の中に『長崎秘録』と名付けられた記録があり、その中に『長崎秘録』二³⁹⁾に宝暦年間の長崎の貿易記録の写しが残されている。その中から次の史料を掲げてみたい。

この記録には、宝暦十一年辛巳（1761）に長崎に来航した12隻と宝暦十二年壬午に来航した15隻の内、宝暦十二年の四月に帰帆した3隻と九月に帰帆した3隻の計6隻の帰帆荷物の事情が知られる。

その内の最初の宝暦十二年四月二十二日に帰帆した巳七番船の記述を掲げてみたい。

巳年七番 寧波船買渡荷物帳 宝暦十二年 午四月廿二日帰帆

船頭曹體三 唐人数八拾三人

37) 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代寶案』校訂本第4冊、沖縄県教育委員会、1993年3月、405頁（599頁）

38) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第16輯、故宮博物院、1972年8月、238頁（872頁）。

39) 愛知県刈谷市図書館蔵『長崎秘録』二（全54丁）（図書番号：登3.815、冊4、門4甲四、號62）

- 一 銀貳百七拾貫目 商賣元代之分
 一 同四拾七貫四百五拾目八分三厘壹毛五弗 有餘賣割増之分
 一 同九貫八百六拾貳匁五分八厘七毛
 一 同三貫百四拾三匁四分九厘三毛五弗
 合銀三百三拾貫四百五拾六匁七分壹厘貳毛

此払

- 銀壹貫百目 銀ニテ相渡候分
 同五拾貫五百七拾目九分五厘七毛 在留遣捨之分
 同貳百七拾八貫七百八拾五匁七分五厘五毛 代リ物買渡候分

内

銅 拾万貳千七百五拾斤七合六夕七才

代銀百拾八匁五百七拾六匁

但平均壹斤付壹匁壹分五厘四毛余宛

煎海鼠 貳万八千貳拾壹斤三夕九才

但平均壹斤付三匁貳分三厘貳毛七拾余宛

干鮑 貳千四拾斤

代銀五貫六百八拾八匁

但平均壹斤ニ付貳匁七分八厘八毛貳弗余宛

鱻鱻 八百四拾斤

代銀壹貫六百八拾目

但壹斤ニ付貳匁宛

鯧 千六百八拾斤

代銀貳貫百八拾四匁

但壹斤ニ付壹匁三分宛

鷄冠草 六千斤

代銀六貫三百目

但壹斤ニ付壹匁五分宛

昆布 拾万九千六拾斤八夕三才余

代銀五拾三貫百二拾六匁四分貳毛

但壹斤ニ付三分三厘四毛宛

酒 五樽

代銀貳百七拾五匁

但壺樽ニ付五拾五匁宛

醤油 四樽

代銀四拾目 但壺樽ニ付拾匁宛

流金道具類

代銀三百三拾目

メ如高

右遺捨并買渡荷物書面之通御座候

宝暦十二年午四月 長崎會所目付 藤田平次左衛門 ㊥ (以下略)⁴⁰⁾

以上の記録を整理すると次の表になる。

表2 宝暦12年8番寧波船帰帆貨物積載銀額 (単位: 匁)

品名	銀額	斤数	品名	銀額	斤数
銀	1,100		昆布	53,126.4	159060.
銅	118,576	102750.7	酒	275	
煎海鼠	90,586.4	280201.3	醤油	40	
干鮑	5,688	21040	流金道具類	330	
鱈鱗	1,680	840	在留遺捨	50,570.9	
錫	2,184	1680	合計	330,456.7	
鶏冠草	6,300	6000			

表3 宝暦12-13年間帰帆唐船積載銅・海産物数量表 (単位: 斤)

年号	番船名	船主名	乗員数	銅	煎海鼠	干鮑	鱈鱗	昆布	丁数
宝暦12	午3番厦門	崔景三	83人	100,000	27,752.4	2,258.9	1,080	155,608.7	7-8
宝暦13	巳7番寧波	曹體三	83人	102,750.7	28,021.3	2,040	840	159,060.8	10-11
宝暦13	巳8番南京	龔子興	80人	150,000	26,390.1	2,123.3	1,080	136,139.4	17-18
宝暦13	巳9番寧波	汪繩武	115人	142,763.5	39,782.9	7,836.6	1,080	157,586.4	21-22
宝暦13	巳10番寧波	袁盛寰	75人	100,000	22,829	5,181.8	420	179,097.8	25
宝暦13	巳12番南京	程玉田 趙主若	112人	161,091.3	24,266.2	3,840	420	158,377.6	28-29
宝暦13	巳6番寧波	方拱宸 沈綸溪	77人	132,816	22,920	5,038.7	600	165,316.4	34-35

40) 『長崎秘録』 式、10丁~12丁 (全54丁)

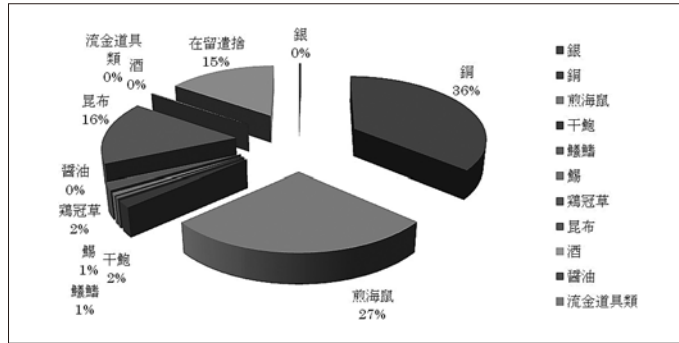


図3 宝暦12年7 番寧波船帰帆積荷額比：銀

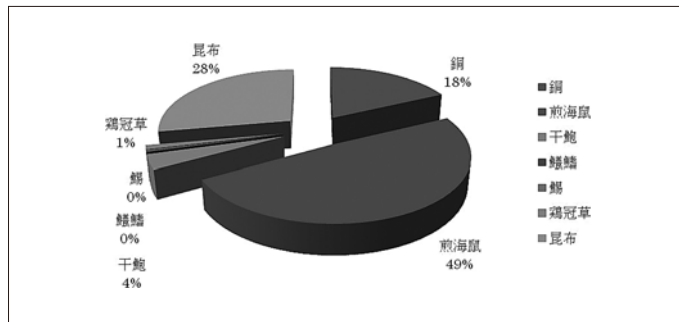


図4 宝暦12年7 番寧波船帰帆貨物比：斤

この頃になると中国船の帰帆の際の積荷貨物としての銅の積載量は減少し、それに対して海産物が増加していったことがわかる。

これらの帰帆した頃に長崎に来航した宝暦十三年（1763）七月七日に入港した王履階船は、唐國ヨリ元絲銀三百貫目持渡ル。此代り銅三十萬斤、内正銅七分、俵物三分、可被相渡約條ニテ、二拾ヶ年可持渡憑文渡置ル。但今年俵物拂底ニ付、正銅三十萬斤相渡サル。⁴¹⁾とあるように、王履階は十二家を代表する商人の一人であり、後に官商ともなった。⁴²⁾ その彼が300貫目の元絲銀を日本にもたらし、銅30万斤の追加輸出を希望したものである。そして彼の条件として30万斤の銅の内、銅を70%、俵物で30%との割合で希望したが、当時俵物が長崎への入荷が品薄であったため、全て銅で30万斤を渡されたとされる。

この事例からもわかるように、俵物が銅に替わる重要な輸出品として中国側商人も高く評価

41) 「長崎実録大成」巻十一、宝暦十三年条、『長崎実録大成』、長崎文献社、1973年12月、278頁（402頁）。

42) 松浦章『清代海外貿易史の研究』151～153頁。

していたと言えるであろう。

明和元年（1764）三番船の帰帆貨物の積載量をオランダ商館の記録⁴³⁾ から銅と乾物海産物のみを表示したものが次の表4であり、それを表示したのが図5である。

表4 明和元年3番唐船帰帆積荷銅・海産物数量表（単位：斤）

明和元年（1764） 3番船	棹銅	煎海鼠	干鮑	鱧鱈	昆布	鰯
	172,550	20,000	6,360	540	174,545	1,080

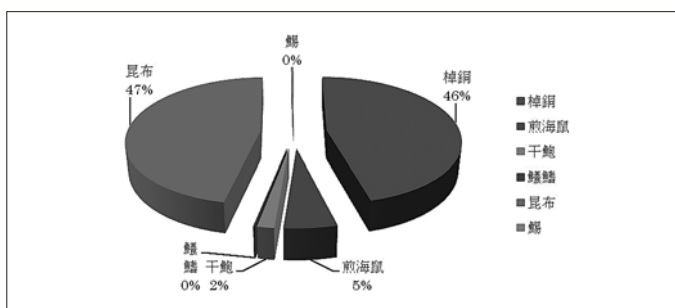


図5 明和元年3番船帰帆貨物積載量比：斤

この頃に長崎から帰帆した唐船がどれほどの銅を積載していたかを記録した清朝官吏の奏摺が残されている。

乾隆二十八年（宝暦十三、1763）正月二十四日付の浙江巡撫であった熊学鵬の奏摺が最初の報告である。

官商范清注、採辦銅斤、由乍（乍浦）起運、解供蘇省、分解五省官銅、該官商、乾隆二十七年、辦回船戸楊士合船、銅斤一千箱、於五月十一日、由乍進口、入境即於十二日、起運赴蘇、於本月二十三日出境、又船戸魏元盛船、銅斤一千箱、於閏五月十七日、由乍進口、入境即於二十六日、起運五百四十箱、又於二十九日、起運四百六十箱赴蘇、俱於六月初一日出境、又船戸施新利船、銅斤一千箱、於九月三十日、由乍進口、入境即於十月初六、七等日、起運赴蘇、於十月十三日出境、均經沿途各県、加謹稽查防護、並無偷盜・沈溺事。⁴⁴⁾とあるように、官商范清注⁴⁵⁾の采配のもとに、乾隆二十七年（宝暦十二、1762）五月十一日に

43) 永積陽子編『唐船輸出入品数量一覽1637～1833年——復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳——』創文社、1987年2月、265頁（396頁）。

44) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第16冊、台北・故宮博物院、1983年8月、655-657頁（872頁）。

45) 松浦章『清代海外貿易史の研究』148頁。

船戸楊士合船が乍浦港に入港した。続いて船戸魏元盛船が閏五月十七日、船戸施新利船が九月三十日に乍浦に入港したことが知られる。五月十一日に乍浦に帰帆した船戸楊士合船は「銅斤一千箱」を、同年閏五月十七日に帰帆した船戸魏元盛船も「銅斤一千箱」を、同九月三十日に帰帆した施新利船も「銅斤一千箱」を積載していた。これらの銅が「官銅」すなわち政府御用の銅として、乍浦から北京に向かって輸送され、北京において銅銭の鑄造原料とされたのである。

これ以降このような記録が乾隆四十八年（1783）まで残され、それらから乍浦に帰帆した長崎からの貿易船は殆どが1,000箱の銅を積載していたことが表6のようにわかる⁴⁶⁾。

表5 清代官商支配の唐船乍浦帰国表

西暦	中国暦	乍浦進港日	進港船名	積載銅（箱）	出典
1762年	乾隆27年分 官商范清注	5月11日	楊士合	1,000箱	宮28/1/24
		閏5月17日	魏元盛	1,000箱	
		9月30日	施新利	1,000箱	
1763年	乾隆28年分 官商范清注	3月7日	何延寶	1,000箱	宮28/1/6
		4月12日	楊士合	1,000箱	
		9月10日	王永慶	1,000箱	
1764年	乾隆29年分 官商范清洪	4月1日	史順興	1,000箱	宮30/1/22
		5月13日	金允泰	900箱	
		9月27日	楊士合	1,000箱	
		11月15日	何延寶	1,000箱	
1765年	乾隆30年分 官商范清濟	3月6日	魏元盛	1,000箱	一31/1/7
		9日04日	林永順	500箱	
			附回 王永順	721箱	
		9日08日	萬友順	1,000箱	
		10月9日	魏元盛	1,000箱	
		附回 林永順	500箱		
1766年	乾隆31年分 官商范清濟	2月12日	金允泰	1,000箱	一32/1/4
		2月24日	史順興	1,000箱	
		5月12日	林永順	1,000箱	
		5月14日	魏元盛	1,000箱	
		9月24日	何延寶	1,000箱	
		9月27日	楊士合	1,000箱	
		10月1日	周順興	1,000箱	
		10月15日	史順興	1,000箱	
		10月19日	魏元盛	1,000箱	
1767年	乾隆32年分 官商范清濟	5月18日	金允泰	1,000箱	宮33/1/3
		10月6日	許咸春	1,000箱	
		10月24日	金萬裕	1,000箱	
		11月20日	萬日新	1,000箱	
		11月20日	魏元盛	1,000箱	

46) 松浦章『清代海外貿易史の研究』354～356頁。

1768年	乾隆33年分 官商范清濟	9月3日 9月3日 9月3日 11月3日 11月13日	萬日新 林永順 何廷寶 金萬裕 許咸春	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一34/1/27
1769年	乾隆34年分 官商范清濟	3月18日 9月20日 9月26日 11月6日 11月21日	楊士合 史順興 魏元盛 金萬裕 何廷寶	1,000箱 1,000箱 1,065箱 1,000箱 1,000箱	一35/1/7
1770年	乾隆35年分 官商范清濟	5月5日 5月7日 9月19日 9月22日 9月22日 10月8日	萬日新 許咸春 楊士合 林永順 金萬裕 何廷寶	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一36/1/11
1771年	乾隆36年分 官商范清濟	3月13日 3月13日 9月9日 9月10日 9月10日 9月10日	萬日新 史順興 金萬裕 周永安 岳順興 范繼宗	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一36/12/11
1772年	乾隆37年分 官商范清濟	2月18日 4月22日 9月8日 9月19日 9月19日	林永順 何廷寶 魏元盛 史順興 萬日新	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一38/1/6
1773年	乾隆38年分 官商范清濟	3月19日 3月22日 8月21日 10月11日 10月18日 10月18日	周永安 金萬裕 林永順 江祥泰 何廷寶 萬日新	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	宮38/12/1
1774年	乾隆39年分 官商范清濟	3月12日 3月25日 3月26日 3月26日 4月27日 9月18日 9月30日	魏元盛 史順興 范繼宗 金源寶 周順利 何廷寶 林永順	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	宮39/12/6
1775年	乾隆40年分 官商范清濟	2月2日 2月2日 4月5日 5月6日 5月9日 9月28日 10月24日 閏10月8日	萬日新 魏元盛 洪成泰 范繼宗 金源寶 周順利 何廷寶 金源寶	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一40/12/27
1776年	乾隆41年分	5月1日 8月22日	林永順 魏元盛	1,000箱 1,000箱	一41/12/12

1776年	官商范清濟	9月19日 9月19日 9月21日 10月11日	洪成泰 范繼宗 萬日新 金源寶	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	
1777年	乾隆42年分 官商范清濟	4月16日 9月8日 9月11日 10月3日 10月9日 10月9日	史順興 周順利 萬日新 魏元盛 林永順 何廷寶	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	宮42/11/24
1778年	乾隆43年分 官商范清濟	4月20日 5月6日 5月23日 9月27日 10月6日 10月8日 10月8日	洪成泰 金源寶 萬日新 史順興 范繼宗 周順利 魏元盛	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	宮43/12/4
1779年	乾隆44年分 官商范清濟	3月9日 4月7日 4月7日 4月7日 10月12日 10月17日 11月4日	何廷寶 林永順 范繼宗 金源寶 周萬順 萬日新 史順興	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一44/12/10
1780年	乾隆45年分 官商范清濟	4月22日 4月24日 5月8日 5月18日 10月12日 10月15日 10月18日	魏宏勝 范繼宗 金源寶 何廷寶 林永順 周萬順 萬日新	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	一45/11/28
1781年	乾隆46年分 官商范清濟			洋銅262,533斤 「洋銅共二十六萬 二千五百三十三鈔、 於乾隆46年6月初7日、 自蘇州起程」 ⁴⁷⁾	宮46/9/19
1782年	乾隆47年分 官商范清濟	5月9日 5月10日 5月12日 10月19日 10月19日 10月25日	周萬順 魏宏勝 何廷寶 金源寶 萬日新 范常吉	1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱 1,000箱	宮47/11/27
1783年	乾隆48年分 官商范清濟 官商王世榮	4月12日 11月1日	林永順(范氏) 萬日新(王氏)	1,000箱 1,000箱	宮48/12/5

注：一は中国第一歴史檔案館の硃批奏摺を、宮は台湾故宮博物院『宮中檔乾隆朝奏摺』を示す。
アラビア数字は、奏摺の旧暦日付を示す。

47) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第48輯、国立故宮博物院、1986年4月、837頁(858頁)

以上のように、官商の長崎に派遣した中国商船は各船ともに10万斤、1,000箱の銅を中国に持ち帰っていたことは明らかである。

4 享和三年（1803）文化元年（1804）における海産物の対中国輸出

寛政三年（1791）の改正貿易仕法による長崎会所の会計の明細を記したとされる『長崎会所五冊物』⁴⁸⁾によれば、銅については、「唐船買渡銅之儀者、御定賣銀高百拾貫目」⁴⁹⁾とあり、唐船一隻について「口船御定高銅拾万斤」⁵⁰⁾であった。そして「唐人渡方之節ハ、壹箱宛正味百斤ニ掛改」⁵¹⁾とされたことから、一隻の当たり10万斤の銅が一箱当たり100斤の重量で1,000箱積載されたことになる。

『長崎会所五冊物』は、俵物について次のように記されている。

煎海鼠・干鮑・鱧鱗を俵物と唱、唐人共買渡申候、則壹船當時買渡平均九拾五貫四百目程之積、壹ヶ年拾艘九百五拾四貫目程、出帆之時々番立仕譯、荷造仕、買渡候儀ニ御座候。⁵²⁾とあるように、唐船の長崎入港が10艘に定められた頃には、各唐船が毎年95貫400目ほどの俵物を長崎から中国に向けて搬出していた。総量は1年に954貫目に達していた。その頃には俵物とは煎海鼠、干鮑、鱧鱗の三品を意味するようになっていたようである。

これに対して、そのほかの貨物として諸色があったが、それに関して『長崎会所五冊物』には、昆布・鯛・茯苓・鶏冠草・所天草・鯉節・千切レ砂食煎海鼠・千切レ蟲入干鮑・藤海鼠・刻昆布・干海老・五倍子・椎茸・干瀬貝・寒天・樟腦・いたら貝・獺皮・御種人参・會津・雲州和人参・銅器物・流金道具・蒔繪小間物・呉服、其外樽物等を諸色と唱、唐人共買渡申候、則壹船當時買渡平均六拾三貫六百目程之積り、壹ヶ年拾艘六百三拾六貫目程、出帆之時々荷造仕、唐人相好候品々買渡候儀ニ御座候。⁵³⁾

とあるように、一般的に言えば銅と俵物を除いたものは全てが諸色として処理されたようである。その諸色には上記に示したように帰帆積載量の多い昆布をはじめ、所天草のような乾物海草類や鯛、干海老、いたら貝などのような乾物海産物などがあつた。

48) 『長崎県史 史料編第四』長崎県、吉川弘文館、1965年3月、1-243頁（919頁）

49) 『長崎県史 史料編第四』39頁。

50) 『長崎県史 史料編第四』40頁。

51) 『長崎県史 史料編第四』39頁。

松浦章「清代官商採辦洋銅辦回船隻」『関西大学文学論集』第43号第4号、1994年3月、38～45頁（228頁）。

52) 『長崎県史 史料編第四』40頁。

53) 『長崎県史 史料編第四』41頁。

長崎歴史文化博物館の所蔵される『享和三年亥年中 出帆引合帳』⁵⁴⁾と『文化元子年中 出帆引合帳』⁵⁵⁾には、享和二年(1802)に長崎に来航した唐船が、帰国に際して積載した貨物の価格や、同船の乗員等の長崎での滞在経費などを精算した記録として残された。

最初の記録である「十二家 戊七番南京船元代銀引目録 永興」との表題が付けられている。十二家とは中国側の荷主のことで、民商と呼ばれる商人集団であり、後に見られる王氏は官商で清政府から指定を受けた商人であった。⁵⁶⁾ 末尾の永興は唐船の船名である⁵⁷⁾。この戊七番船の貿易額とその内訳、銅と俵物そして諸色の内訳は次のようになる。

残式百六拾六拾貫九百六拾式匁三分五厘八毛七弗

此渡方

百拾五貫目 商賣高代り銅拾万斤

但百斤ニ付百拾五匁宛

百五拾壹貫九百七拾式匁三分五厘八毛七弗

内 九拾壹貫百七拾七匁四分壹厘五毛式弗 俵物

六拾貫七百八拾四匁九分四厘参毛五弗 諸色⁵⁸⁾

とあり、戊七番船の貿易額266貫962匁余の内、115貫目が銅で渡され、91貫177匁余が俵物、60貫784匁余が諸色であった。この三者を対比すれば、銅が43%、俵物が34%、諸色が23%となる。

これを享和三年の10隻と文化元年の10隻の合計20隻の銅、俵物、諸色の貿易総額の平均銅が115貫目、俵物97貫余斤、諸色の66貫余の貿易比率が銅41%、俵物35%、諸色24%と比較しても大差がない。

この頃の唐船の帰帆貨物の積荷の貿易額に占める比率は同様であったと思われる。

享和三年(1803)文化元年(1804)帰帆唐船の銅・海産物積載銀額：貫目 表6

年号	番立名	船名	荷主	銅	俵物	諸色	昆布	貨物総額	出典:丁
享和三年	戊7番南京	永興	十二家	115,000	91,177	60,785		26,6962	8
享和三年	戊8番寧波	日新	王氏	115,000	89,455	59,537		26,4091	18
享和三年	戊10番南京	皆吉	十二家	115,000	101,760	67,840		28,4600	27
享和三年	亥1番南京	金全勝	王氏	115,000	98,048	65,365		27,8413	38

54) 『享和三年亥年中 出帆引合帳』(全135丁)長崎歴史文化博物館蔵(図書番号:渡辺316-112)。

55) 『文化元子年中 出帆引合帳』(全135丁)長崎歴史文化博物館蔵(図書番号:渡辺17-113)。

56) 松浦章『清代海外貿易史の研究』144~146頁。

57) 松浦章『清代海外貿易史の研究』289頁。

58) 『享和三年亥年中 出帆引合帳』8丁(全135丁)長崎歴史文化博物館蔵(図書番号:渡辺316-112)。

享和三年	亥2番南京	永泰	十二家	115,000	100,370	66,913		28,2283	48
享和三年	亥4番寧波	源盛	王氏	115,000	100,560	67,040		28,2600	58
享和三年	亥3番寧波	永寶	十二家	115,000	86,654	57,770		25,9424	87-88
享和三年	亥5番寧波	源寶	王氏	115,000	90,247	60,164		26,5411	100-101
享和三年	亥7番南京	大萬安	王氏	115,000	93,178	62,119		27,0297	113
享和三年	亥6番南京	皆吉	十二家	115,000	134,160	89,440		33,8600	124-125
文化元年	亥8番寧波	永祥	十二家	115,000	107,414	71,609		29,4023	23
文化元年	亥9番寧波	金全勝	王氏	115,000	131,284	87,523		33,3807	35
文化元年	亥10番南京		十二家	115,000	124,542	83,028		32,2570	45
文化元年	子3番南京	得勝	王氏	115,000	98,419	65,613		27,9032	55
文化元年	亥王氏番外	源盛	王氏	115,000	58,218	58,218	25,300	25,6736	65
文化元年	子1番寧波	永泰	十二家	115,000	90,526	60,350		26,5876	89
文化元年	子2番寧波	大萬安	王氏	115,000	89,381	59,587		26,3968	99
文化元年	子4番寧波	日新	王氏	115,000	97,690	65,126		27,7816	109
文化元年	子7番南京	永興		115,000	98,024	65,350		27,8374	137
文化元年	亥十二家番外	永寶	十二家	115,000	59,350	59,350	25,300	25,9000	141
合計				2,300,000	1,940,457	1,332,727		562,3883	
平均				115,000	97,023	66,636		281,194	

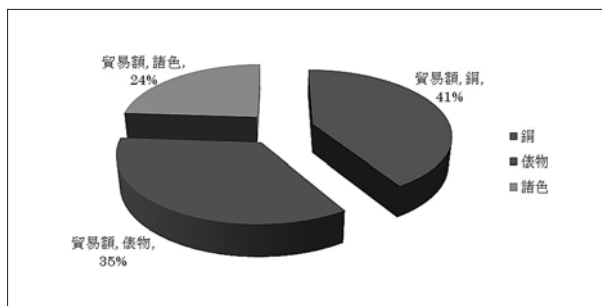


図6 享和3年文化元年唐船帰帆貨物貿易額の平均

5 幕末における海産物の対中国輸出

天保四年（1833）における中国船が中国へ持ち帰った貨物の数量がオランダ商館の記録からわかる。⁵⁹⁾ それを表示すると次のようになる。

59) 永積洋子編『唐船輸出入品数量一覽1637～1833年——復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳——』328頁（396頁）。

表7 天保4年(1833)帰帆唐船積載主要貨物表 (単位:斤)

番船名	入港日	帰帆日	銅	煎海鼠	干鮑	昆布	寒天
辰五番船	天保3年12月1日	天保4年4月6日	105,000	20,000	25,000	490,000	12,000
辰六番船	12月4日	4月6日	105,000	21,000	25,000	394,000	12,000
辰七番船	12月4日	4月6日	105,000	21,000	25,000	442,000	12,000
辰八番船	12月6日	4月6日	105,000	21,000	25,000	418,000	12,000
辰九番船	天保4年1月18日	4月6日	105,000	21,000	25,000	406,000	12,000
平均			105,000	20,800	25,000	430,000	12,000

入港日・帰帆日は大庭脩編『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳』関西大学東西学術研究所、1974年3月、13、208～209頁(286頁)、積荷は永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧1637～1833年——復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳——』328頁(396頁)による。

天保四年(1833)四月六日に長崎から帰帆した辰五番船から辰九番船の五隻の積載貨物の銅、煎海鼠、干鮑、昆布、寒天についての平均積載量を円グラフで表示すると図7のようになる。これから見れば明らかに昆布の積載量が銅の4倍を示し上記の時期より激増していたことがわかる。

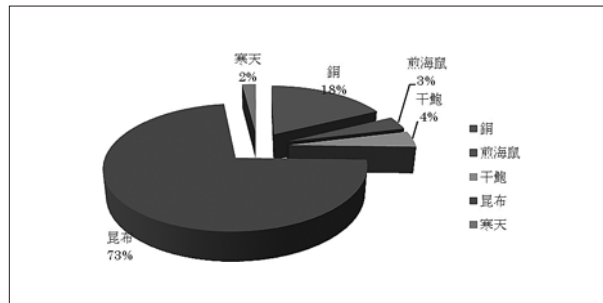


図7 天保4年(1833)帰帆唐船5隻平均積載量(斤)

6 幕末文久二年(1862)幕府官船千歳丸の上海への積荷

江戸初期の鎖国政策を打破して、徳川幕府は初めて海外へ官船千歳丸(せんざいまる)を派遣することになり、これまで長崎に入港していた中国船の帰帆荷物として購入していた貨物を参考として、上海への積載貨物を決めたとされる。⁶⁰⁾ その中に積載量の多い貨物名を掲げてみたい。

長崎会所からの貨物

60) 川島元次郎「最初に試みた上海貿易」、川島元次郎『南國史話』平凡社、1926年5月、115-166頁(378頁)

煎海鼠	24,000斤
干鮑	36,000斤
鱧鱈	1,800斤
所天草	2,000斤
鶏冠草	3,000斤
三ツ石昆布	3,600斤 ⁶¹⁾
長崎市中から	
壹番鰯	3,000斤
貳番鰯	2,550斤
棕呂皮	5,687斤
會津産和人参	2,500斤
雲州和人参	2,500斤
石炭	250,000斤 ⁶²⁾
本商人	
所寒天	1,800斤
三ツ石昆布	26,424斤 ⁶³⁾

以上が積載量の多い物で、このほか60余種類の小量貨物が積まれていた。旧来の中国船が長崎からの帰帆貨物を参考に購入したとされるが、銅は含まれていない。新しい物として登場するのが石炭であった。

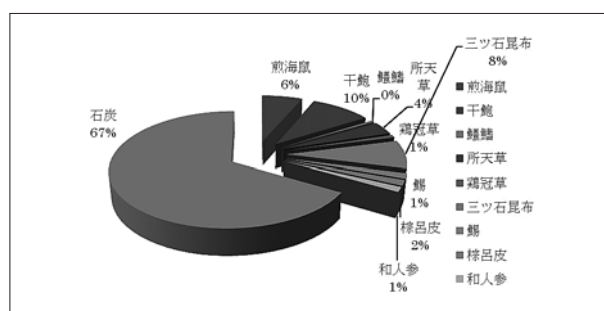


図8 文久2年(1862)千歳丸積載貨物

61) 川島元次郎「最初に試みた上海貿易」、川島元次郎『南國史話』124-125頁。

62) 川島元次郎「最初に試みた上海貿易」、川島元次郎『南國史話』133-134、138-139頁。

63) 川島元次郎「最初に試みた上海貿易」、川島元次郎『南國史話』139頁。

7 日本産海産物の生産地

上記した乾物海産物が、日本のどの地から長崎に入荷されたかが具体的に地名がわかるものとして『華蟹交易明細記』⁶⁴⁾に収められた「俵物諸色出所」に、生産地に関する記録が見られる。これらは18世紀中頃から19世紀初期に記されたようで、このことから江戸時代中後期の各海産物の生産地を考えることは可能であろう。そこで記録のある煎海鼠、干鮑、昆布の三種類について述べたい。⁶⁵⁾

煎海鼠が長崎に入荷してきた先の生産地を同書から現在の地方名によって整理したのが次の表である。⁶⁶⁾

生産地	入荷額 斤	生産地	入荷額 斤	生産地	入荷額 斤
現在：北海道地方					
松前	62100				
現在：東北地方					
津軽	33800	南部	3070	仙台	2800
現在：関東地方					
安房	3100	上総	1060	武蔵	4800
相州	8500	尾張	1200	三河	11000
現在：北陸地方					
能登	18800	越前	1100	越中	450
備前	15000	備中	700		
現在：近畿地方					
伊勢	11000	志摩	7100	紀州	850
丹後	1330	播磨	2000	淡路	2000
現在：四国地方					
阿波	2500	讃岐	2320		
現在：中国地方					

64) 『長崎県史 史料編第四』所収、「華蟹交易明細記」(245～425頁)(919頁)による。

65) 江戸時代における俵物の生産が、江戸幕府および各藩の統制のもとに行われていたかを究明したものが、小川国治『江戸幕府輸出海産物の研究——俵物の生産と集荷機構——』吉川弘文館、1973年2月、1-411頁である。オランダ史料を中心に江戸時代の日本から中国への海産物の状況を講究したのが、荒居英次『近世海産物貿易史の研究——中国向け輸出貿易と海産物——』吉川弘文館、1975年2月、1-594頁である。中国への輸出事情は、小川は中国での消費事情を明治以降の内容を中心に述べている。荒居は江戸時代の中国での消費事情をほとんど松浦章「日清貿易による俵物の中国流入について」『千里山文学論集』第7号(1972年9月、19～38頁)を参考にしている。

66) 『長崎県史 史料編第四』388～389頁。

安芸	28000	周防	23000	長門	11250
石見	500	出雲	2800		
現在：九州地方					
豊後	270	筑前	320	対馬	8580
平戸	12100	壱岐	3000	唐津	6300
肥後	2400	天草	5700	大村	14120
薩摩	1200				

それらを、グラフに整理すると次の図9のようになる。

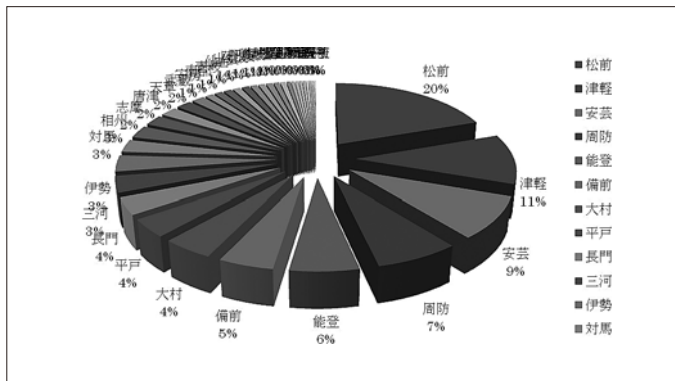


図9 19世紀初期の煎海鼠の長崎入荷量比
『華蠻交易明細記』による

次に干鮑の長崎へ入荷した先の生産地を同じく「華蠻交易明細記録」から現在の地方名によって整理したのが次の表である。⁶⁷⁾

地名	干鮑 斤	地名	干鮑 斤	地名	干鮑 斤	地名	干鮑 斤
現在：北海道地方				現在：九州地方			
松 前	210			筑 前	3050	豊後	860
現在：東北・北陸地方				天 草	4050		
南 部	9100	佐渡	2230	対 馬	20770	壱岐	3000
現在：中国地方				平 戸	55300	五嶋	28450
長 門	5950						

67) 『長崎県史 史料編第四』389頁。

これらを産地別に示したのが図11である。

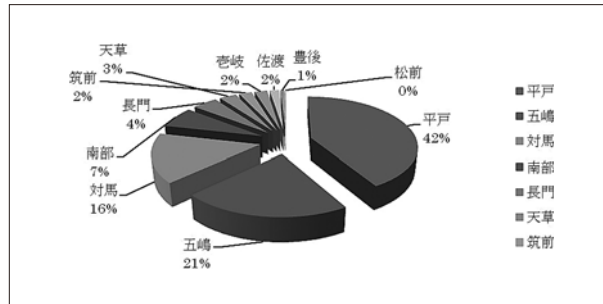


図10 19世紀初期の干鮑の長崎入荷量比
『華蠻交易明細記』による

『華蠻交易明細記』に見える昆布の長崎への入荷先は松前一箇所で「松前 七拾九万斤程」⁽⁶⁸⁾とあるのみであり。殆どの昆布が現在の北海道の南部で生産されたものが北前船によって下関を経由して長崎に入荷されたものと思われる。

8 日本乾物海産物と中国市場

日本の長崎から中国商船によって中国市場に輸出されたのであるが、中国でどのような需要の事情があったのであろうか。このことに関して既に述べている⁽⁶⁹⁾が、ここで若干触れてみたい。

干し海鼠は、海鼠の腸を抜きゆでて乾燥させたものであるが、中国では海參と呼称され人參に劣らぬ効果があると珍重された。干し鮑は明代から高価な贈り物として知られる。鱻鱈も明代には食用として利用されていたようである。これらのものが、乾隆五十七年（1792）に刊行された袁枚の『随園食單』の海鮮單の中で、古から珍重される食品の中に海のものとは含まれていないが、「古八珍并無海鮮之説、今世俗尚之、不得不吾從衆」⁽⁷⁰⁾としてこの当時人々の間で珍重される料理として登場してきたのが「海鮮單」であった。その海鮮單の中には、燕窩（つばめのす）に次いで「海參三法」、「魚翅二法」、鰻魚の料理が述べられている。海參は干し海鼠であり、魚翅は鱻鱈であり、鰻魚は干し鮑であり、まさしく日本から中国商船で中国に向けて輸

68) 『長崎県史 史料編第四』389頁。

69) 松浦章『清代海外貿易史の研究』388～397頁。

70) 王英中校点『随園食單』15頁（全99頁）（王英志主編『袁枚全集』伍（全8冊）所収、江蘇古籍出版社、1993年9月出版）。

出された乾物海産物であった。⁷¹⁾

清代の中国市場での反響を具体的に明らかにすることは、困難であるが、清末の状況は、明治期の領事報告から見ることは容易である。そこで明治19年（光緒十二、1886）8月28日付の在天津帝國領事館報告である「清國天津市場海産物景況」⁷²⁾を参考に掲げたい。

同報告によれば、天津に輸入された「海産物ハ十中八九ハ本邦産ニシテ、就中朝鮮産煎海鼠、臺灣産鱻鱈ノ如キ従前ハ本邦産ニ對シ競争セシモ、目下殆ント消滅ノ色ヲ現ハセリ」⁷³⁾とあるように、日本産の干し海鼠が朝鮮産を圧倒し同様に日本産の鱻鱈も台湾産の鱻鱈を凌駕していた。さらに昆布に関しては「日本ヨリノ輸入ト掲ケタルハ昆布一項ノミニシテ、其他ノ海産物ニ至リテハ支那内地産及外國産ノ輸入若干トノミ記載アリテ、特ニ本邦ヨリノ輸入年額ヲ記載セサルヲ以テ、本邦ヨリハ絶テ輸入ナキニ似タレトモ、實際市上ニ陳列賣買スル海産物ハ多ク本邦産ノモノニシテ、支那商人モ亦日本産ト稱呼スルヲ見レハ、特ニ海関報告中ニ外國産ト記載スルモノハ【其中多少魯國産ト南洋産アルニモセヨ】概シテ本邦産ニ係ルモノトスルモ、蓋シ大過ナルベシ」⁷⁴⁾と述べられるように、乾物海産物の殆どが日本産であったことがわかる。

各海産物の中国市場での消費の状況に関して同報告書では次のように述べられている。

- 煎海鼠（清稱海參ハイシェン）我國ヨリ當地ニ輸入スル所ノ煎海鼠ハ専ラ九番十番ノ二種ニシテ、十番ニ大小ノ別アリ。消費尤モ多シ。九番ハ形チ大ニシテ価貴キカ故ニ消費高少シ、總テ刺ノ多クシテ煮後膨張スルモノヲ可トス。

目下其相場百斤ニ付、十番大三十五両、小二十六両、九番四十八両ナリ。

當地ニ輸入スル高麗參（一名工別大コンピエター）ト稱スルモノハ即チ朝鮮産煎海鼠ニシテ、目下其相場百斤ニ付、大二十三両、小十五両ナリ。

日本産ハ形状ノ美ナルニヨリ評判宜シク、朝鮮産ハ価安ク味美ナルヨリシテ消費多シト云フ。⁷⁵⁾

- 昆布（清稱海岱ハイタイ）濃綠色ニシテ新鮮精細ナルヲ貴フ。少シク陳舊ナレハ消費極メテ悪シ。八九月ノ頃、山西・河南地方ニ輸送スルモノ最モ多シ。又當地ノ人民ハ化痰ノ功アリトテ、平常飯菜ニ用イルコト少ナカラス。

従前本邦産昆布ノ未タ輸入セサル以前ハ廣東地方産出ノモノヲ輸入セシモ、本邦産ノ輸

71) 松浦章『清代海外貿易史の研究』398頁。

72) 『通商彙編』明治十九年第二回、三省堂、1889年2月（全194頁）、46～50頁。

73) 『通商彙編』明治十九年第二回、46頁。

74) 『通商彙編』明治十九年第二回、46頁。

75) 『通商彙編』明治十九年第二回、47頁。

入アリシ以來、其価廉ニ味美ナルカ為メ、廣東産ハ殆ント压倒セラレ、目下僅少ノ輸入アルニ過キス。⁷⁶⁾

- 刻昆布（清稱岱絲タイスー）刻昆布ハ粗細ノ二種ナレトモ細ナルモノ最モ支那人ノ嗜好ニ適ス。⁷⁷⁾
- 伊多刺貝（清稱乾貝カンペイ）本邦海産物中最モ評判ノ好キモノハ伊多刺貝ナリ。殊ニ其形チ圓クシテ、大ナルヲ可トス。此貨ノ需用ハ多ク山東・山西地方ニアリ。蓋シ支那地方ニハ伊多刺貝ノ産出極メテ少キヲ以テ、當地ニ輸入スルモノナシ。⁷⁸⁾
- 鱻鱈（清稱魚翅イユイチー）黒白ノ二種ノモノ消費尤モ多シ。何種ヲ問ハス肉厚ク翅ノ多キモノヲ貴フ。翅根ニ多ク肉アリテ徒ラニ不用ノ斤量ヲ増スハ支那人ノ喜ハサル所ナリ。台灣産ハ味極メテ佳ニシテ煮後膨張シテ雪ノ如シ。…其評判極メテ宜シケレトモ価ノ貴キヨリシテ、需用少シ。
目下相場、白鱻鱈六十両、黒鱻鱈四十両【一副百斤ニ就テノ価ナリ。一副トハ頬後ノ両邊ニアル翅二枚ヲ云フ。背上ノ魚尾ヲ算セズ】ナリ。
南方ヨリ輸入スル堆翅（トイチイ）ト稱スルモノアリ。是レハ鱻ヲ割キ煮シタル後、晒シタルモノナリ。其消費高極メテ少ナク一定ノ相場ナシ。⁷⁹⁾
- 寒天（清稱洋粉ヤンフエン）本邦ヨリ輸入スル寒天ハ盡ク絲寒天ナリ。大形ニシテ四角ナルモノハ見本ノ來リタルコトモアリシカ、賣捌方悪シカリシ。尤モ天津ニテハ消費極メテ少ナク専ラ北京・山西・山東・河南地方ニ輸送ス。
寒天ニ頭番、二番、三番ノ三種アリ。共ニ白色ヲ貴フ。就中頭番ハ純白色ニシテ消費高最モ多シ。⁸⁰⁾
- 鰻（清稱魷魚ユーイユー）形大ニシテ肉ノ厚キヲ貴フ。前年台灣地方ヨリ輸入セシモノハ本邦産ニ比スレハ大形ニシテ需用少シカラサリシカ【価百斤十三兩位ニシテ】本邦産ノ輸入ニ圧セラレ、近來ハ本邦産ノミ行ハレ北京・山西地方ニ輸送スルモノ多シ。⁸¹⁾
- 鮑（清稱鮑魚パライユイ）本邦産輸入品中ニ大中小ノ三種アリテ、中形ノモノ消費最モ多ク、外乾キ肉厚クシテ黄黒色ナルヲ貴フ。北京・山西・河南地方ニ輸送スルモノ多シ。

76) 『通商彙編』 明治十九年第二回、47頁。

77) 『通商彙編』 明治十九年第二回、47頁。

78) 『通商彙編』 明治十九年第二回、47～48頁。

79) 『通商彙編』 明治十九年第二回、48頁。

80) 『通商彙編』 明治十九年第二回、48頁。

81) 『通商彙編』 明治十九年第二回、48頁。

前年臺灣産ノ輸入アシシカ我國産ニ圧セラレ、其賣捌方悪シカリキ。⁸²⁾

- 海苔（清稱紫菜ツォザウイ）大形ニシテ紅色ヲ帯ヒ砂ノ攪入セサルモノ貴フ。専ラ北京・河南地方ニ輸送シ本地ノ消費極メテ少シ。寧波ヨリ運來ノ為メ當地ニ來ル船中装載シテ來ルコトアリ。然レトモ少数ナレハ市上ニ差響ク程ノコトナシ。⁸³⁾
- 「トサカ」海苔 紅色ヲ帯ヒ砂ノ攪入セサルモノヲ可トス。多ク河南・山東地方ニ輸送ス。…其鄰菜ト唱ヘ形圓クシタ紅葉ニ彷彿タルモノアリ。多ク廣東・厦門ヨリ來ル消費高シ。我「トサカ」海苔ノ及ハザル所ナリ。⁸⁴⁾

以上のように明治19年（光緒十二、1886）当時において日本から輸出された乾物海産物のうち、特に珍重された乾物海産物の煎海鼠（清稱海參ハイシェン）は形状が美しいとして評価が高かった。昆布（清稱海岱ハイトイ）は、薬効があるとして日常の「飯菜」として用いられ、山西省、河南省へも流通していた。鱻鱈（清稱魚翅イユイチー）は、厚くヒレの多いものが好まれていた。寒天（清稱洋粉ヤンフエン）は中国の内陸部で好まれ、天津にもたらされた物は、同地からさらに北京・山西・山東・河南地方へと搬出されていた。鰻（清稱魷魚ユーイユー）は、日本産が好まれ天津から北京や山西省へと輸送されたようである。鮑（清稱鮑魚パライユイ）は、台湾産の物も多かったようであるが、日本産の物が肉厚で乾燥度がよいとされ、天津から北京や河南省そして山西省へと搬出された。海苔（清稱紫菜ツォザウイ）や「トサカ」海苔も、天津には中国国内産の物ももたらされるが、日本産の物が珍重され、先の乾物海産物と同様に河南省などにももたらされ、とりわけ「トサカ」海苔は、沿海を有する山東省までも搬出されていた。

これらは、明治期の記録から見た日本産乾物海産物の記録ではあるが、江戸時代に日本からもたらされた物も同様な嗜好によって消費されていたと考えられる。

9 小 結

上述のように江戸時代を通じて長崎から中国向けに輸出されていた海産物、煎海鼠、干鮑、鱻鱈を中心にその輸出量の推移を輸出品目名がわかる史料を中心に述べた。

日本で唐船と呼称された中国帆船は、巨大な帆柱を2本ないし3本を要する海上輸送を行ったため、長距離輸送の帆走に際して必ず安定した底荷、バラストが必要であった。そのバラス

82) 『通商彙編』明治十九年第二回、49頁。

83) 『通商彙編』明治十九年第二回、49頁。

84) 『通商彙編』明治十九年第二回、49頁。

トになったものが、清朝中国からの帆船にとって、中国から長崎へは大量の砂糖⁸⁵⁾でありその他に絹織物や書籍、漢方薬剤などが大部分を占めていた。これに対して中国帆船が長崎から本国に持ち帰ったのは、清朝政府から渴望された銅銭を鼓鑄のための主要な原料であった日本産の銅である。中国では「洋銅」と呼称された日本産の銅が、江戸時代の前期には中国への供給源として重要で大きな割合を占めていた。しかし時代が降るにつれて日本産の銅の産出量の漸次減少にともない、長崎からの中国船の帰帆貨物としての銅の積載量は減少し、江戸時代中後期以降は1隻が持ち帰る銅の積載量は10万斤に限定されてしまう。

それに対して新たな輸出品として中国側からの要望が高まった乾物海産物であった。煎海鼠、干し鮑、鱻鱈は俵物三品として注目され、江戸時代の中後期から幕末まで大きな比重を占め、さらに昆布や鰯、所天草などの海草類も注目された。とりわけ俵物三品とされた煎海鼠は「海參」、干し鮑は「鮑魚」、鱻鱈は「魚翅」として清代中期より流行したこれらの海鮮菜を利用した海鮮料理の重要な食材となったのである。⁸⁶⁾ 帆船航運からの視点で言えば、唐船の長崎からの帰帆貨物の底荷としての銅の積載量が減少した分を乾物海産物で充足する傾向になったと言える。

【附記】

本稿は、ドイツ・チュービンゲン大学中国・韓国研究学部で開催された The Conference on “Monies, Markets, and Finance in China and East Asia, 1600–1900 : Global and Comparative Perspectives” (2011年10月5–7日) において報告した原稿をもとに作成したものである。

85) 松浦章「江戸時代唐船による砂糖輸入と国内消費の展開」335～359頁。

86) 松浦章「日清貿易による俵物の中国流入について」19～38頁。

松浦章『清代海外貿易史の研究』382～402頁。